

目的 配偶者の死によって、長年の結婚生活を通して形成されていた生活の秩序と均衡が崩れる。配偶者と死別後は、死別の悲しみをのり越えて、生活を再組織化する努力をしなければならぬ。本研究では、配偶者と死別後の生活への適応のし方や適応状況を明らかにするために、生前の夫婦関係、配偶者の死と介護、死別の悲しみからの立ち直り、死別後における家族構成や居住地の異動、現在の生活状態と満足感などを調べた。

方法 1988年12月に、男性9人と女性10人に面接して聴き取り調査を行った。福岡市と北九州市の老人クラブと軽費老人ホーム、老人結婚相談所・無限の会の福岡支部を通して、配偶者と55歳以上で死別し死別後15年未満で60歳以上の者を対象に選んだ。

結果 生前の夫婦関係については、男性は再婚希望者でも結婚満足度の得点が高く、妻との思い出を美化する傾向が強い。死別当初は一般に、寂しいという感情以上に虚脱感や無気力感におそわれ、急死の場合には、配偶者の心身の不調への配慮不足について自責の念も生じやすい。配偶者と死別後に、家族構成も居住地も変化していない者は約半数である。死別後に子供夫婦に対して勢力の低下が生じ、関係が悪化したため別居したケースもある一方、同居がうまくいっている場合でも、配偶者との間におけるような遠慮のない一体感を得にくく、少なからず寂しさの原因になっている。死別の影響は、家事を妻任せにしていた独居の男性の場合にはとりわけ深刻だが、その場合でも子供への期待や不満は意外に少ない。また、再婚を強く望んでいる者は総じて、L.S.Iによる生活満足度の得点は低い反面、将来に希望や期待をもって生活しているという特徴がみられる。